

氏名	佐々木 豊志
学位の種類	博士（事業構想学）
学位記番号	第4号
学位授与年月日	平成27年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学位論文題目	環境社会の変化と自然学校の役割
論文審査委員	主査 風見 正三 副査 小嶋 秀樹, 宮原 育子

## 論文の要旨

本研究の目的は、国内で自然学校と呼ばれる事業体のこれまでの特徴を整理する。今後、自然学校の事業がより良く展開され、さらに新たな自然学校の事業が環境社会に役立つための共通の理念を示す。さらに、自然学校のあるべき指針を示し、今後の環境社会や地域の中で自然学校が担う新たな役割の可能性を示すことを目的とする。

国内の自然学校を取り巻く社会的動向、特に環境に関連する社会の変化とともに発生して広がった自然学校の変遷や実態を調査し、自然学校の特徴を整理するための観点を示した。

- ①自然学校の教育方法に特徴がありそれを活かした教育力がある
- ②自然学校は「つなげる」という社会関係資本の活かし方に特徴がある
- ③自然学校は社会や地域の課題を見つけ、それを解決する力に特徴がある

以上の特徴を考察するために全国の自然学校の創設者・代表者にアンケート及びインタビュー調査を行い、調査から得られた回答から自然学校の特徴が抱える要素を考察する。

アンケート及びインタビューの回答から「自然学校事業の3つの基軸」のそれぞれが持つ構成要素を示した。自然学校が新たな事業の領域や事業の方法など、地域に貢献ができる事業体として重要な要素を考察し、これまでの自然学校がより良く社会に貢献し、さらに新たに興る自然学校が持続可能な社会的企業としての機能と役割を担うための共通の理念を示した。

上記の考察から、自然学校の新たな役割としてのハブ機能を示した。自然学校が取り組んでいる事業領域に関するアンケートの回答から、今後自然学校が社会的企業として地域での様々な活動の領域の関わる役割としての【ハブ機能】をあげることができる。

ここで言う【ハブ機能】は、一般の事業プロジェクトのように、事業主体が事業予算を組みその事業を統括し仕切るプロデュース機能ではなく、事業予算がなくても地域社会のリソース、地域の潜在力をつないで引きだす役割を担い、ポテンシャルをつないで新たな事業価値を生むことができる機能であり、自然学校が社会的企業として、持続可能な事業フレームの基盤に成りうる機能であり、この機能を遂行するためには、前述した、3つの基軸を併せ持つことで自然学校の役割の相乗効果が生まれ、これまでに解決できなかった地域の課題を解決できる可能性がある」と結論づけた。

## 審査結果の要旨

本論文は、日本における「自然学校」の歴史的な発展過程を踏まえた上で、そのあり方や社会的役割について豊富な事例分析を通して明らかにしたものである。論文申請者は、「自然学校」の創設者・経営者として環境教育の先駆者として現場の課題に向かってきた実践者であり、長年にわたる「自然学校」の活動経験や情報蓄積を整理しながら、フィールド研究を重ねたものを学術論文としてまとめている。

本論文の構成としては、「自然学校」の誕生から様々な環境問題や震災など社会の変化に伴い、多様な事業形態へと発展を遂げた「自然学校」の実態を整理し、それらを踏まえた上で、「自然学校」の創業者に対するアンケート調査やヒアリング調査を実施し、それらの分析を行うことにより、「自然学校」が持つべき3つの「基軸」（教育・課題解決・社会関係資本）を明らかにしている。

第1章では、研究の背景や目的と方法について整理を行い、第2章では、自然学校の定義や発展の過程を整理し、自然学校全国調査を踏まえた自然学校の現状と課題を考察している。第3章では、公害から環境社会への変化の動向を踏まえながら、持続可能な社会へむけた体験教育の課題や震災後の教育環境の変化に着目しながら、自然学校を取り巻く環境社会の変化や課題について明らかにしている。第4章では、さらに、自然学校の創設者や代表者に対する意識調査を実施し、自然学校の特徴として考えられる要素について考察を行った。これらの考察を踏まえて、第5章では、自然学校の教育力の特徴、第6章では、自然学校の連携の特徴、第7章では、自然学校の課題解決力の特徴について、考察を行い、第8章では、結論として、本研究のまとめと意義、残された課題や展望について整理を行っている。

本論文の主な結論としては、これまでの「自然学校」の歴史的な役割を整理した上で、これからの「自然学校」が持つべき3つの基軸を明らかにするとともに、これらの基軸が連携することによって、「自然学校」が「社会的企業」として社会に貢献する事業体へと発展していく可能性を導き出していることである。なお、論文を構成する主要な部分は、日本環境教育学会等の掲載論文（査読論文）に基づいている。

以上のように、本研究は、これまで事業経営的な側面からは課題が多かった「自然学校」を持続的な事業体に発展させていくための可能性を提示するものであり、学術論文としての十分な独創性、新規性、有用性を有するものであるとともに、事業構想学想学の観点からも大変意義深い論文と評価できる。